

國學院大學學術情報リポジトリ

カルモアの炭鉱労働者・硝子労働者とジャン・ジョ
レース(3・完)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 謙一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001156

〔研究ノート〕

カルモアの炭鉱労働者・硝子労働者と ジャン・ジョレース (3・完)

横山 謙一

序章－問題の所在

第1章 タルン県とカルモア炭鉱

第1節 炭坑の街カルモア：歴史・沿革

第2節 十九世紀後半のカルモアとカルモア炭鉱

第2章 カルモア炭鉱労働者の生活環境と労働

第1節 カルモア炭鉱労働者の労働と生活

第2節 カルモア炭鉱の労働環境

－労働災害・疾病からの、そして老齢退職後の保障－

第3節 労働組合組織の推移変遷と労組指導者カルヴィニャック

(以上國學院法學第33卷4号)

第3章 1892年のカルモア炭鉱のストライキ

第1節 カルモアの炭坑争議の歴史：1855年から1914年迄のカルモア炭坑でのストライキ・争議事件

第2節 1892年の2回にわたるカルモア炭鉱ストライキ

(以上國學院法學第52卷1号)

第4章 カルモアの硝子労働者とジャン・ジョレース

——1895年の硝子労働者のストライキと

「労働者硝子工場」の創設——

はじめに－問題の所在：ジャン・ジョレースとカルモアの硝子労働者

第1節 硝子壘工場と硝子壘製造労働者

第2節 硝子壘製造業と硝子労働者の世界

第3節 硝子壘製造業の機械化と合理化

第4節 1895年の硝子労働者のストライキ

1. ストライキの組織化過程
 2. タルン県連合とカルモアの社会主義派組織
 3. 1895年7月31日のカルモア硝子工場労働者のストライキ
 4. 「ロックアウト」後のカルモア硝子工場
- 結 論 1895年のカルモア労働者硝子工場の創立過程を中心に (以上本号)

第4章 カルモアの硝子労働者とジャン・ジョレース ——1895年の硝子労働者のストライキと 「労働者硝子工場」の創設——

はじめに—問題の所在：ジャン・ジョレースとカルモアの硝子労働者

1892年の2度にわたるカルモア炭鉱労働者のストライキが労働者側の成功と勝利に終わったのとは対照的に、1895年の硝子労働者のストライキは惨めな失敗に終わった。しかし最終的にはその地点にとどまるのではなく、出発点として解雇された硝子労働者たちはジョレースやフランスの労働運動の後援を受けて「労働者硝子工場」を創設する。

1892年3月と8月から11月までの2度におよぶカルモア炭鉱労働者のストライキの後に、ジョレースは炭鉱労働者たちの支持を得てカルモア炭鉱株式会社副社長ドゥ・ソラージュ侯爵 marquis de SOLAGES (ジェローム・リュドヴィク Jérôme-Ludovic) が議員を辞任した後に空白になった議席を補充する1893年1月の補欠選挙で社会主義派の代議士となる。彼が社会主義派議員になって2年後の1895年7月31日には同じカルモア市にある硝子工場労働者がストライキに突入する。硝子工場労働者の組合運動の指導者ボード⁽¹⁾ BAUDOT の解雇に抗議して始められた。前回の炭鉱労働者のストライキとは異なり、今回のストライキにはジョレースは大きく関わっていた。当時のリボ首相に宛てたジョレースの8月7日付の電文からも関わりの深さは知ることが出来る。

「…カルモアの状況は急速に重大化しております。昨日火曜日午前11時に、

こちらでは誰もがストライキは終熄したと思いました。会社経営側からの調停拒否を知らされてすぐに、足下を掬う罌に気付いて、私の提案に基づいて全体一致で職場復帰を決定しました。労働者たちはボードの生活の保障をしたうえで、彼抜きで硝子工場に復帰することを決定しました。彼らはすぐさま電報で代表取締役のルセギエ RESSÉGUIER にこの決定を伝えました。このことをまた硝子工場の監督者にも伝達しました。監督者は終わらせた方が良いと言いました。カルモーには安堵感と充足感が広がりました。…(略) …こうした間にもルセギエ氏は硝子工場をもっと後にしか再開するつもりはないし何時になるかはわからないとカルモーの労働者に電文を打ちました。このことは 8 日間このかた極限まで折り合いをもとめた労働者のあらたな解雇と締め出しを行うことを意味しました。この知らせはあらかじめの商店主と労働者を苦しみと怒りに追いやりました。そしてストライキが再開されました。経営者によって、それも彼のみによって再開されたのです。そして今回は際限のない絶望的闘いであります。なぜなら思いがけない仕打ちにどの労働者も誠実な人も屈服できなくなったからです。ルセギエ氏が労働者たちを疲弊させ、叩きのめすために闘おうとのぞんでいるのです」と労働者の窮状を首相に訴えた。そしてこうした窮状を打開するために、ジョレースは労働者硝子工場の設立を構想した。それも交通の便など諸般の事情を配慮して隣の選挙区にあるアルビ市に建設されることになり、ジョレースは大きな票田を失うことになる。1896年10月25日に開設される 1 年ほど前の1895年11月26日の「ラ・プチット・レピュブリーク La Petite République (小共和国)」紙に協同組合とパリの労働組合の提案を受けて「労働者硝子工場 Verrerie ouvrière」を構想するにいたった経緯を次のように書いている。「ここに終局的に設立される。ルセギエ氏が食いつめさせようとしたカルモーの活動家たちはフランスの労働者全体が彼らのために建設した工場に身を寄せるところを見つけたので人々は今では胸をなで下ろした。既に数週間まえから、横暴な企業主の頑迷な固執を目の当たりにして工場に対し工場を対置し反動的で乱暴な工場主の儲けも思い上がりもやっつけるすごいアイデアが浮か

(3) んだ」と「労働者硝子工場」と題する記事の冒頭に書いている。ストライキを始めたのは硝子工場労働者であったが、彼はその運動を支え、運動の調整役・支援者では終わらずに、硝子労働者のための最終的解決策まで見出したのであった。

彼が30歳を超えて長い省察の末に社会主義に行き着いた1890年代に、フランスでは漸くイギリスやドイツに後れをとりながら、技術革新に伴う新しい労働形態の導入が始まった。しかしそれと平行して伝統的労働形態、すなわち職人的・熟練労働的部門が依然として残存していた。ジョレースと深い関わりを持ったカルモアの硝子壘製造労働者はその典型であった。(4) 彼らは高度な職人的技術によって高い賃金を保証されていたが、一方で彼らの職人的熟練労働は機械化・合理化による脅威に脅かされていた。

第1節 硝子壘工場と硝子壘製造労働者

1895年の硝子工場労働者のストライキの敗北の結果、創立されることになる「労働者硝子工場」は100年以上の時の流れを経ても未だもって操業している。

県庁所在地であるアルビの人口が1856年時点で14,636人であったのに対し、カルモアは1841年に2,000人を越えて都市の仲間入りしたばかりの、たったの3,743人の都市であった。(5) いまだカルモアは農村部と結びつきの深い小都市であった。ドゥ・ソラージュ侯爵がカルモア炭鉱のほか硝子工場やアヴァラ製鉄所 forge des Avalats を経営していたが、採算の悪い硝子工場はトゥルーズの卸売業者フェルナン・ルセギエに、製鉄所はアルビの鋳造業者ルイ・ジレ Louis GILLET に売却した。

硝子壘工場の経営を引き継いだルセギエは1862年にカルモア市内の鉄道駅に近い場所に工場を移し、操業を拡大した。ドゥ・ソラージュはカルモアとアルビ、そしてトゥルーズを結ぶ幹線の設置を求めた。1864年の幹線布設の完成は、一気にカルモアの工業化をもたらす。

都市化が進むにつれて、住民は自給自足から離脱し、製造職人の数が増加する。食料雑貨店 grocers は 23 軒になり、11 軒の精肉店ができた。パン販売店は 1851 年の 6 軒から 26 軒に増加したが、菓子製造販売店は 2 軒に過ぎなかった。パンは労働者階級の日常食であったが、ケーキは贅沢品であったことをあらわしている。それに仕立屋が 17 軒、美容室が 12 軒存在したが、これは中産階級の広がり⁽⁶⁾を示している。

この頃には土地（農地）は社会的地位を示す源泉ではなく、職業こそがそれをあらわすものとなっていた。それは国民的価値の変化から生じたものである。1880 年代には財産は産業の経営体と富の所有から生起するようになった。普通選挙は政治的影響力と政治権力がもはや土地所有の領域で決定力を持つようなものではなくなっていた。

カルモアの地理的立地と佇まいは大きく変貌した。硝子壺製造労働者は市内に集中して住むようになり、農業を兼業する比率も減り始める専門化した炭鉱労働者たちも市内に移り住むようになり、市は急速に拡大発展し、街路も拡大され、1861 年には街灯が設置されるなど市の外観もおおいに变化した。旧市街の西側と北側に著しい変化が生じる。1866 年から 1876 年の 10 年間に、駅と硝子工場に近い「リュ・ドゥ・ラ・ガール（駅前通り）rue de la Gare」と「リュ・ドゥ・ラ・ヴェルリ（硝子工場通り）rue de la Verrerie」の住宅は 2 倍になり（「表-IV」参照）、かつ各戸に住む家族数は労働者街ほど多く、硝子壺製造労働者はここに集中して住むようになって、労働者街が出現する。ル・セル川 Le Cerou を隔てて北側にはサント・セシル街区 quartier Sainte-Cécile があり、炭鉱労働者が集中して住んでいた⁽⁷⁾。

1754 年にカルモアで硝子壺製造工業は始まった。ジェローム・リュドヴィク・ドゥ・ソラージュ侯爵の曾祖父の父にあたるガブリエル・ドゥ・ソラージュ勲功伯爵 chevalier が「カルモア・ロワイヤル硝子壺工場 Verrerie Royale de Carmaux」を建て、1862 年にフェルナン・ルセギエの「サント・クロチルド硝子壺工場 Verrerie Saint Clothide」に引き継がれた。

結論から述べれば、1895 年に硝子壺製造労働者が大ストライキを行なって

表－Ⅳ カルモア市の主要街路別住居数の変遷 (1866-1886年)

街路名	1866年 (A)	1876年 (B)	1886年 (C)	増減数 (C)－(A)
Route Impériale (1870年以後 Nationale)	101	107	107	+ 6
Rue de la Gare	29	52	72	+43
Rue de la Verrerie	3	11	25	+23
Rue Impériale (1870年以後 Nationale)	16	31	24	+ 8
Rue de la Tour	71	78	49	－22
Rue du Centre	27	36	49	+ 9
Cambon	31	28	36	－ 4
Deux Ponts	17	18	15	－ 2
Pont Vieux	18	15	13	－ 5

[出典] *Archives municipales Carmaux*. Cité par Joan Wallach SCOTT : *The Glassworkers of Carmaux. op. cit.*, p. 14

表－Ⅴ 1866年から1886年までのカルモアの主要街路における
1戸あたりの住居者数

街路名	1866年	1876年	1886年
Route Impériale (1870年以後 Nationale)	7	6	6
Rue de la Gare	9	10	10
Rue de la Verrerie	6	13	10
Rue Impériale (1870年以後 Nationale)	6	6	6
Rue de la Tour	7	6	7
Rue du Centre	7	7	7
Cambon	5	6	6
Deux Ponts	6	5	5
Pont Vieux	4	5	7

[出典] *Archives municipales Carmaux*. cité dans *Ibid.*, p. 15

大量解雇され、1896年に労働者自身が経営する自主管理の労働者硝子壘工場を設立した事件はフランスでは広く知られる。既に述べたように、この工場は現在まで存続している。

表-VI カルモールの人口増加

1856年	1876年	1886年	1891年	1896年
3,743人	6,160人	8,059人	9,531人	9,993人

【出典】 *Archives municipales. Liste nominative de population. cité dans Ibid., p. 15*

1851年の全国人口調査の時点では、この硝子壘工場は、ブレ Blaye にあるドゥ・ソラージュの城館の敷地に建っていた。一方、硝子職人たちは城館の敷地内に、彼らの補助労働者は敷地の周囲に住んでいた。

第 2 節 硝子壘製造業と硝子労働者の世界

前回の1885年の総選挙では、ジョレースなど穏健共和派がタルン県の定数 6 名中 5 名を当選させ圧勝した。しかし1889年の総選挙では、フランス全体と同じようにタルン県でもブーランジスムは退潮したが、共和派も議席を減らし、当時共和派の議員であったジョレースも落選した。反対に教権主義保守派はドゥ・ソラージュ侯爵を含めて同県の定数 6 議席中 4 議席を獲得した。⁽⁸⁾

鉾山労働者が集中して居住するようになったサント・セシル地区は、戦闘的労働者階級の中心地となり、1892年総選挙では73%の住民が社会主義派に投票した。⁽⁹⁾

1893年 1 月22日に行なわれた辞職したドゥ・ソラージュ議員のあとを補充する代議院議員補欠選挙でジョレースは社会主義派代議士として初当選したが、この時の第 2 回投票でのカルモー市における得票は投票総数2,128票中1,584票で74%を上回った。⁽¹⁰⁾

市議会に目をやれば、1888年に選出された23人の議員のうち、たった 2 人だけが土地所有者を肩書きとしていた。その他は多様で 2 名のホテル経営者、3 名のパン販売業者、1 名の会社経営者、不動産鑑定士、公証人、靴製

造業者、時計製造業者、鉱山労働者、2名の硝子製造労働者がいた。⁽¹¹⁾

硝子壘工場が創業されてから1880年前期まで硝子工業の技術と労働の職人的性格は殆ど変わらなかった。硝子壘製造労働者はすぐれて高度な職人的技能をもとめられる職種であった。経営者に雇われ、彼の工場で働き、賃金を受け取っていても、労働力の募集徴募と人材確保や、見習いの訓練、品質管理、労働条件の設定等は専ら労働者自身が行なった。そして彼らは当時のフランスの労働者の中で、最も高給を支払われていた職種の一つであった。そして労働者の中のエリートであった。⁽¹²⁾⁽¹³⁾

硝子労働者は1つのチームによって構成されていた。チームの頂点には親方である「硝子壘吹き souffleur」がおり、その下に2人の見習い「グラン・ギャルソン grand garçon」と「ギャマン (小僧) Gamin」あるいは「プチ・ギャルソン petit garçon」が働いていた。そしてさらにボトルを運ぶ「運び屋 porteur」がいた。親方と2人の見習いだけが硝子職人 verriers と呼ばれていた。⁽¹⁴⁾「運び屋」は通常9歳か10歳の親方の息子であった。彼は漸次に冷却する水槽に、ついで硝子壘を重ね仕分ける「アランジュール (仕分け係) arrangeur」まで運ぶ。このアランジュールは12歳から13歳までに技術的見習いを始める。これらの見習いたちは両者とも道具と硝子を準備する。若い見習いは鉄の硝子吹きパイプ la canne を掃除し暖める。年長のグラン・ギャルソンはパイプの入り口の大きさを調整し、壘を損なう砂や石を溶けた硝子から取り除く作業を行う。こうした補助的作業を行いながら、要領を身につける。グラン・ギャルソンは壘を吹く作業にさえ携わる。最終的に壘を切り離し、縁を作る。

このチームは12時間で56本の壘を製造するか、1時間で5本のボトルを製造する。こうした作業を5年間続けて一人前の硝子製造職人となる。賃金は1832年まで、請負業のように6か月分を見習い工の分を含め手渡されていた。それ以降は2か月分を硝子壘吹きに支払った。1837-38年になると賃金支払いの形態にも大きな変化が生じ、半月分が支払われるようになり、ドゥ・ソラージュが施行したこの制度をルセギエも受け継いだ。そして1754年

と1882年には製造したボトルの数に従って給与が支払われた⁽¹⁵⁾。硝子工業という職業は貴族に限定された職業（ツールズにはブルジョアの経営者もいた）で、貴族の地位を失わずに継続できる数少ない職業の一つであった⁽¹⁶⁾。勿論被雇用者である硝子労働者は貴族ではなかった。かれら労働者は見習養成の職務を負わされており、それ故に自分の息子を硝子労働者にする例が多かった。

1754年から1850年の間、親方の硝子職人の息子だけが、父親の地位を引き継いだ。1793年から1850年の間、20人の硝子職人がカルモーで結婚したが、そのうち 8 人（40%）が硝子労働者の息子であった。ルセギエが経営を引き継いだ最初の10年の間、その数は著しく落ち込んだ。1866-1875年には、11%の硝子労働者だけが、硝子労働者の父親を持っていた。この落ち込みはルセギエがなるべく迅速に徴募するために、地域の労働者の子弟を採用したからであった。その事実は1866-1875年に結婚した40%がタルン県の出身者で

表一Ⅶ カルモーで結婚した硝子労働者の父親の職業（10年ごと）1866-1905年

年 度	硝子労働者	硝子労働者補助職	鉱山労働者	農 民	その他	不 明	硝子労働者結婚総数
1866-1875年 ⁽¹⁷⁾	11%	3%	22%	11%	33%	19%	27
1876-1885年	40%	5%	7%	9%	7%	33%	43
1886-1895年	21%	8%	12%	13%	27%	19%	90
1896-1905年	13%	4%	14%	18%	17%	34%	118

【出典】 Joan Wallach SCOTT ; *The Glassworkers of Carmaux*, Appendix, op. cit., p. 203

表一Ⅷ カルモーで結婚した硝子労働者の出生地（10年ごと）1866-1905年

年 度	タルン県	タルン県に隣接する県	ロワール県とロレーヌ県	その他	外国	総 数
1866-1875年	40%	26%	30%	4%	0%	27
1876-1885年	9%	9%	37%	44%	0%	43
1886-1895年	18%	18%	12%	48%	2%	90
1896-1905年	61%	14%	11%	14%	0%	118

【出典】 *Ibid.*, Appendix, op. cit., p. 203

表－Ⅸ 10－19歳の硝子労働者の父親の職業 1876年・1891年・1896年

年 度	硝子労働者	鉱山労働者	農 民	その他 ⁽¹⁸⁾	不明	10－19歳の硝子労働者総数
1876年	55%	14%	0%	13%	18%	22
1891年	17%	25%	6%	28%	23%	183
1896年	23%	26%	5%	27%	18%	151

【出典】 *Archives municipales. Carmaux, Les liste nominative de population, 1876, 1891, 1896.*
cité dans *Ibid.*, Appendix, op. cit., p. 203

あったことを見ても分かる。一方で結婚したものの数は9%だけであった。

最後に付け加える必要のある重要な事柄が一つある。それは意外な硝子労働者の平均寿命である。鉱山労働者は労働災害や塵肺などにかかわらず、硝子労働者よりも平均寿命が長い。1853-1862年の鉱山労働者の平均寿命が42歳であるのに対し、1866-1875年の硝子労働者の平均寿命は34歳である。後者が伝染病や流行病で若くして無くなるのがその原因である⁽¹⁹⁾という。おそらくは呼吸器の疾患であろうか。

労働争議の面から見るならば、半ば農業世界に根ざした、半ば地元の農民でもある鉱山労働者は、紛争と騒動の根源には一見なりにくいように見える。一方高い賃金を求めて全国を転々とし、地域社会に根ざさない硝子労働者は紛争と騒擾の火元になりそうに見える。しかし実際にはカルモアに限っても1855年から1870年の間に6度のストライキを行い、49名の鉱山労働者が逮捕されている。フランス全体では、1830年から1880年までの間に、鉱山労働者は106回のストライキを行っている。これに対し硝子労働者は9回しかストライキを行っていない。それも拠点のリヨンとリヴードゥージェル⁽²⁰⁾ Rive-de-Gier に集中していた。

第3節 硝子壘製造業の機械化と合理化

1878年にリヴードゥージェルの経営者リシャルム RICHARME は新しい技術を導入し、生産コストを引き下げするために、ジューメンスの溶解炉を導入

した。タルン県のヘゲモニーを確立しようとしていたルセギエは、鉄道の線路近くに工場を建てたばかりでなく、彼の工場の監査官であるプラネ PLANET の意見を入れて、ジーマンスの溶解炉を彼の工場にも導入に踏み切る。それは古い「コークス炉 four à pot」ではなく、「ガス炉 four à gaz」を導入したのであった。この溶炉によって 3 交代制であれば 24 時間の稼働が可能となった。そして 3 倍のボトルの生産が可能となる。これにともなって硝子工場の従業員の数も急増する。1876 年から 1884 年の間、200 名から 265 名の間であったのに対し、1885 年には 447 名となる⁽²¹⁾。そして 1866 年にその数は急速に増加する。ちょうど工場が「ガス溶解炉」を導入した時期と一致する。熟年労働者を必要としなくなり、若年労働者、しかも父親を硝子労働者としないう若年・未熟練労働者が大量にこの世界に入り込んだ。加えて女性の労働力が硝子壘製造労働者の補助労働力として大量に投入された。ワイン用硝子壘が日産 33,000 本量産されるまでになったが、葡萄の恐るべき害虫であるフィロクセラが蔓延し、猖獗を極めるとワイン用の硝子壘への需要が極端に落ち込んだ。ガイヤックなどのワインで知られるタルン県を例にとれば、1883 年に 49,386 ヘクタール (ha) のワイン畑が耕作されていたが、1888 年には 27,901 ヘクタール (ha) に耕作地は急減した。1883 年に 1,150,255 ヘクトリットルあった葡萄酒収穫量が、5 年後には 10 分の 1 の 100,047 ヘクトリットルへと激減した (南仏での被害が甚大であったために減少数は著しい)。他の地域でも同様で、フランス全体の葡萄酒収穫量は 1883 年に 46,165,006 ヘクトリットルあったものが、24,031,771 ヘクトリットルに約半減している。硝子壘製造労働の機械化は硝子労働者の価値を低落させ、過剰生産は状況をさらに悪化させた。この頃には各地を遍歴する硝子労働者にも雇用の口は少なくなっていた。1886-1895 年にこの街を来訪した硝子労働者のこの街への定着率が、そしてこの街出身の硝子労働者の割合が急速に高まる。

この時代の機械化に警鐘を鳴らす人物もいた。それは生産過剰の危機であると同時に、熟年労働の崩壊の危機である。

1890 年から 1900 年の時期には直前の時期よりも 4 倍も土地を購入する硝子

労働者が増加した。しかし土地の面積は狭小で、購入した労働者の割合は8%にすぎなかった。

第4節 1895年の硝子労働者のストライキ

1. ストライキの組織化過程

新技術の導入と機械化による問題に対応するために労働組合への組織化が求められた。1890年に300人のサン・クロチド工場の労働者がカルモア硝子労働者組合 *Chambre syndicale des verriers de Carmaux* に加入した。1年後に1890年にリヨンで開催された創立大会で誕生した硝子全国労働組合連合 *Fédération nationale du Verre* に430名のカルモアの労働組合が加入した。カルモアの組合を組織した硝子労働者はほとんどがほとんどがモンリュソン *Montluçon* からやってきた労働者でミシェル・オークチュリエ *Michel AU-COUTURIER*⁽²²⁾、ジャン・ボード⁽²³⁾、マクシミリアン・シャルパンティエ *Maximilien CHARPENTIER*⁽²⁴⁾ が代表する労働組合の活動家であった。モンリュソンはフランス・マルクス主義を代表するゲード派の拠点であり、ジャン・ドルモア *Jean DORMOY* が著名な活動家であった。その他フィリップ *Philippe RENOUX*・ルイ・ルヌー *Louis RENOUX* 兄弟、エミール・ルナール *Émiles RENARD*、マリウス・ロジエ *Marius RAUZIER* が代表的なリーダーであった。ストライキが頻発する地域ではなかったモンリュソンからやって来た労働者を採用したが、1895年のストライキに際して彼等が中心の人物となり、ルセギエは彼等の再雇用を拒否した。彼等は地域社会の中で婚姻や結婚式の証人を務めるなどして、家族的紐帯を強く結んでいた。

1892年の時点での市議会議員は全て組合の活動家で、市長はソーラージュ家やルセギエ家を震撼させた名うての社会主義者にして組合活動家であるジャン・バッティスト・カルヴィニャック *Jean-Baptiste CALVIGNAC*⁽²⁵⁾ であった。彼と彼の社会主義派の仲間は1892年のカルモア市議会議員選挙で対立候補なしに当選した。しかしその1894年2月25日に「選挙人名簿作成の不備」

を理由に市長職を休職処分にされると、これに抗議して市長を辞任し、4月22日に市議補欠選挙で当選して市長に復帰すると、タルン県知事府は選挙無効を宣告した。その後もカルヴィニャックは繰り返し市長職の解任処分に処せられまた返り咲くという繰り返しの末に市民権剥奪や投獄と罰金刑宣告を経験する。最終的には1900年に市長職に復帰して1929年までこの職を務める。

2. タルン県連合とカルモーの社会主義派組織

タルン県にはカルモー、グローレ Graulhet、カストル Castre、アルビ Albi、ガイヤック Gaillac の労働者に社会主義思想の影響を受けた住民が⁽²⁶⁾いた。1882年の補欠選挙にはアルビで労働者の選挙候補リストが出された。1886年1月の隣県アヴェイロン Aveyron 県での有名な炭坑ストライキに際してはタルン県でもいくつかの集会が開かれた。1887年には帽子製造労働者、建設労働組合、アルビ労働者・社会主義サークル、鉱山労働者組合、硝子労働者組合などから構成されるタルン・アヴェイロン労働者連盟 La Fédération des Travailleurs du Tarn et de l'Aveyron が創立された。ゲード派とヴァイアン派の影響下にあったこの組織は4年間の命脈を保った。本格的組織に強化されるのはジャン・バティスト・カルヴィニャックを中心とした鉱山労働者の組織化がすすんでからであり、一方硝子労働者は会社に解雇されるマリアン・ボードやのちに結成される労働者硝子工場の経営管理者となるミシェル・オークチュリエを中心に社会主義者の組織化が前進する。1892年8月のカルモー炭坑の大規模ストライキも1895年7月のカルモー硝子工場のストライキもカルヴィニャックとボードの解雇に端を発したことは記憶にとどめる必要がある。

タルン県全体の社会主義派の組織について見るならば、1902年のリヨン大会でジョレース派とゲード派・ヴァイアン派の統一が失敗したあとで、タルン県でもカストル市の市議会を掌握するアンリ・ベス Henri BÈS を中心とするゲード派とジョレースを中心とするフランス社会党右派 PSF Parti

socialiste français に加入するワインの街ガイヤックに拠点をもちルネ・カバレス René CABARÈS を書記長とするガイヤック郡グループとに分裂⁽²⁷⁾する。しかしジョレースの統一のための奮闘が功を奏して、1905年のグロブ大会での統一社会党＝SFIO の結成以前に統一の態勢を整えていた。

3. 1895年7月31日のカルモア硝子工場労働者のストライキ

1895年7月25日に硝子労働組合書記マリアン・ボードがアルビの郡議会議員に選ばれた。しかしルセギエはボードの郡議会議員という公職と硝子吹き労働者の仕事とが両立し得ないとしてボードを解雇した。⁽²⁹⁾この処分⁽²⁸⁾に抗議して硝子工場の労働者は7月31日にストライキの決行を賛成192票対反対83票で決定した。このころかなりの硝子壘の在庫を抱えていたので経営者側には有利であった。⁽³⁰⁾ストライキは4か月続いた。スト突入の翌日、ジャン・ジョレースと数人の硝子労働者全国連盟のメンバーは、こうした事態に対処するためにカルモア入りした。労働者たちはボードへの解雇処分は自分たちへの攻撃と見なした。⁽³¹⁾仲裁は受け入れられないと見た硝子工場労働者は8月6日にストライキを解除した。⁽³²⁾経営側はストライキを解除した労働者の職場復帰を認めずに「ロックアウト」で応えた。

4. 「ロックアウト」後のカルモア硝子工場

2週間後の時点で、スト参加者全員の再雇用は行わずに会社に忠実な硝子労働者のみを再雇用した。組合の全労働者再雇用要求は拒けた。だが労働組合と賃金レベルの維持は保障した。しかし組合はルセギエの労働組合破壊すのと賃金を引き下げるためにロックアウトを行っているのだと反論した。⁽³³⁾ストライキが始まる前には580名の硝子労働者が雇用されていた。⁽³⁴⁾8月20日から労働者徴募が開始される。月末まで約80名の労働者が会社との交渉に入る。しかしストライキ開始後2か月半経過した10月15日になってさえも工場に復帰した硝子吹き労働者の数は8名にとどまった。⁽³⁵⁾こうして苦境に立った経営者側のルセギエは、県知事や中央政府の政治的圧力を活用しようとし

た。そして切り崩しに応じない硝子工場労働者の家族にさえ圧力が加えられていった。⁽³⁶⁾

一方カルモアの労働者と全国の硝子労働者は地域ぐるみ、全国的規模で募金を集め、ストライキを継続する硝子工場労働者を財政的に援助した。この年の 8 月 15 日には炭鉱労働者は 500 フランを硝子労働者のストライキ基金に寄付した。⁽³⁷⁾ あまつさえストライキ期間は、鉱山労働者は 1 月に 1 日分の賃金を供与したのであった。そしてジョレースたち社会主義派の指導者は全国を巡回して、寄金を集めたのである。

他方で工場労働者の職場復帰を妨害した（「労働の自由」にたいする侵害）としてオークチュリエらの組合指導者たちは逮捕され、処罰を受けた。こうした労働組合指導者へのきびしい措置にもかかわらず硝子工場労働者の切り崩しがさほどの功を奏しなかったのは、ストライキ参加労働者の地域ぐるみ家族ぐるみの結束がかたかったからであると評されている。また全国的規模での解雇された労働者への金銭的財政的支援もかなりの規模で行われた。この財政的支援はのちほど「労働者硝子工場」の財政的基盤の創出へと結びついていく。ルセギエのサンクロチド硝子工場に復帰しようとするかつてのストライキに参加した硝子労働者はこの献金を受け取れなくなった。特に親方格である硝子吹き労働者と見習い工の関係が両者の間に介在すると、関係の悪化は深刻なものとなった。

10 月の期間だけで復帰する労働者への妨害等の理由でのべ 15 人が逮捕された。主な事例だけでもオークチュリエは 500 フランの罰金と 4 か月の禁錮が、ミション MICHON⁽³⁸⁾ という労働者も 3 か月の禁錮を言い渡されている。組合財政担当のシャルパンチエにいたっては組合のストライキ寄金とともに拘禁・押収された。⁽³⁹⁾ もはや経営側との妥協の余地は見いだしがたく、自主管理・労働者管理の工場を設立せざるを得なくなっていく。

結論 1895年のカルモア労働者硝子工場の創立過程を中心に

『カルモアの炭鉱労働者』の著者ロランド・トランペは、彼女の論文「ジョレースと労働者硝子工場」の中で、労働者硝子工場は意図的・計画的に樹立されたものではなく偶然の所産・状況の産物であったと指摘している。⁽⁴⁰⁾すなわち経営者側ルセギエが強硬に交渉を拒否し妥協を拒んだ結果、ジョレースたちは自分たちの硝子壘生産工場を設立せざるを得ないように追い詰められたのであった。ジョレースたちは自主管理・労働者管理の構想をいくぶんも持っていなかったからではなく、ルセギエの硝子工場労働者の要求への峻拒という立ちはだかる困難にたいするやむを得ない反応・対応として設立されたものであった。

今回の労働争議が始まって間もなく、アンリ・ロシュフォール Henri ROCHEFORT は労働者が管理する工場について言及したが、当時は全く無視され、労働者やジョレースがこれに注目するようになるのは3か月後のことであった。⁽⁴¹⁾ロシュフォールはストライキ当時には極右ナショナリストのジャーナリストとして知られていた人物であった。しかし四半世紀以前のロシュフォールはパリ・コミューンに参加し、囚われてヌーヴェル・カレドニー流刑の罪を言い渡され、やがて島を脱出したことでも知られている。次第に昔のコミューン仲間からのナショナリストからも見放されていったこの年老いた元コミューナルの提言は無視されるべきではないし、ジョレースも「ラ・プティット・レピュブリーク」紙でその意義を強調している。⁽⁴²⁾

ジョレースの「デベッシュ (至急便) Dépêche」紙と「ラ・プティット・レピュブリーク」紙を通じての全国的資金援助をもとめるキャンペーンは大きく功を奏し「労働者硝子工場」創立へとつながっていく。代議院での5時間⁽⁴³⁾にわたる長大な演説は代議院議員からなる聴衆を魅了した。そして労働者への社会政策の面で大きな後れをとっていた第3次⁽⁴⁴⁾リボ内閣はこのカルモア硝子工場のストライキが引き金となって倒閣する。

予想外の障害は社会主義派内部の障害であった。社会主義諸党派の中には「協同組合運動」自体を「階級闘争」の否定として評価しない、あるいは否定するドクトリンを党是とした党派があった。ゲード派＝フランス労働党である。選挙こそ思いがけない大成功で合法的権力奪取の手段として条件付きで（国政選挙はブルジョア内閣への入閣をもたらずとして「ブルジョア諸党派」との提携は否定された）是認されることになった。労働組合や生活協同組合は「階級闘争」に従属するものとされた。当初ゲード派は「労働者硝子工場」に協力的であったが、ゲードが強硬な立場へと転換し、強硬に抵抗するようになる。⁽⁴⁵⁾しかしながら、解放の手段ではないが、闘争の手段であるとして、結果的にはゲード派は「労働者硝子工場」に協力することになる。⁽⁴⁶⁾

具体的に「労働者硝子工場」設立が日程に上ると、大きな対立点・争点があたまを持ち上げた。フランス社会主義の二大潮流が「労働者硝子工場」をめぐる主導権争いを演ずるにいたるのである。

当初ジョレースは当時広くサンディカリストに浸透していた「鉱山を鉱山労働者へ la Mine aux mineurs」の硝子工場版である「硝子工場を硝子労働者へ la Verrerie aux verriers」という戦略・戦術を社会主義的解決の最終的手段とは考えていなかった。この点においてゲード派と一致していた。しかしまた協同組合に暁通していた協同組合組織と活動家の見解を聴取すべきだとの考えに達していた。パリ地方の協同組合組織は、消費生活協同組合 le Congrès des Sociétés Coopératives de consommation を経て、硝子工場協同組合の提案を実現するための「組織化委員会 Commission d'Organisation」⁽⁴⁷⁾が誕生する。労働総同盟 CGT の影響下のこの委員会はパリ地方の労働組合と生活協同組合からのみ構成される組織であって、カルモアの硝子労働者も政党組織も排除したものであった。しかもゲード派の影響下にあった「フランス全国労働組合・労組グループ Fédération Nationale des syndicats et groupes corporatifs」も事前に知らされていなかった。このためロシュフォールと連携していたフランス全国労働組合・労組グループや政党組織からの反発が猛烈であった。ロシュフォールはアルビ労働者硝子工場の敷地を

購入する資金となる10万フランをダンプール夫人から預かっていたのであった。⁽⁴⁸⁾ 2つの委員会は「労働者硝子工場」の設立規約をめぐって対立する。

最終的には労働者硝子工場の利益は経済的・協同組合的組織にのみ供されるが、ジョレースの妥協案が認められて、株主である経済的・協同組合的組織をへて政治的組織にも献金として供されることも認めるという規約が可決される。

1895年10月25日には「労働者硝子工場」創立の盛大な会が催され、748の労組、65の生活協同組合、1,122の政治組織・グループが参加した。

しかし労働者硝子工場が諸般の事情でカルモアからアルビに移転することがおおやけになると、カルモア炭鉱労働者をはじめとするカルモアの多くの諸組織から抗議と危惧の声が上がった。多くの硝子工場の労働者がアルビに移転すると——政治の舞台で社会主義勢力の勢力が削がれ——カルモアの政治状況にも大きな影響を与えるとの不安と危惧がカルモアの労働者の心の内に生まれたのであった。

『カルモアの鉱山労働者』の著者ロランド・トランペも1898年のアルビ第2区でのジャン・ジョレースの落選⁽⁴⁹⁾の背景にはアルビへの工場移転が大きく作用したと評している⁽⁵⁰⁾。

むすびとして言えば、カルモアの炭鉱労働者と硝子工場労働者は、ジャン・ジョレースの選挙区であるアルビ第2選挙区において2大支持基盤であった。有権者数で見れば労働者数が硝子工場労働者よりもかなり多かった炭鉱労働者が数的に大きな比重を占めたけれど、硝子工場労働者は数には換算できない重要性を持っていた。外から流入した労働者が多かったとは言え、市民生活への影響力は「労働者硝子工場」創立大会に参加した組織の数の多さからも一端をうかがえる。しかしこの欠損を埋め合わせて1902年以降の総選挙のすべてでジャン・ジョレースは勝利を収める。また統一社会党 SFIO 内部でタルン県連は人数が少ないながら、おおくの重要な決議案を提起し、他の決議案にも名を連ねた。人口の少ない農村県のタルン県が社会党において無視できない勢力を持ちえたのは、その支柱としての中核としてのこれら

炭鉱労働者と硝子工場労働者の役割を決して軽視することは出来ない。(了)

- (1) ボードの詳しい経歴については注(23)を見よ。
- (2) Jean JAURÈS : «Télégramme de Jaurès au président du Conseil» *La classe ouvrière. Textes rassemblés et présentés par Madeleine REBÉRIOUX*. Paris. Petite collection maspero. 1976, pp. 55-56
- (3) JAURÈS «Verrerie ouvrière» dans *Ibid.*, p. 58
- (4) Madeleine REBÉRIOUX ; «Jaurès et la classe ouvrière» dans *Jaurès et la classe ouvrière*. collection MOUVEMENT SOCIAL, Paris, Éditions ouvrières, 1981, pp. 13-15
- (5) 人口密度は1841年には1平方キロあたり153人、1891年には686人、1911年には791人に及んだ。Joan Wallach SCOTT : *The Grassmaker of Carmaux. French Craftmen and Political Action in a Nineteenth-Century City*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press. 1974. p. 17
- (6) *Ibid.*, p. 16
- (7) *Ibid.*, p. 13
- (8) FAURY, Jean ; *Cléricalisme et anticléricalisme dans le Tarn (1848-1900)*. Toulouse. Association des Publications de l'Université de Toulouse-le Mirail. 1980 pp. 164-165, 167-173
- (9) Joan Wallach SCOTT : *The Glassworkers of Carmaux. op. cit.*, p. 14
- (10) Cf. Archives départementales du Tarn. II³. 66
- (11) SCOTT : *The Glassworkers of Carmaux. op. cit.*, p. 17
- (12) 特に硝子労働者の中でもタルン県のそれはきわめて高給が支払われており、県平均の労働者の日給が5.27フランであったのに対し、タルン県の硝子労働者は12.00フラン支払われていた。*Ibid.*, p. 40 タルン県の大工業の中でもふつう3フランから4フランであった(平均3.5フラン)のに対し、21歳以上の成年労働者には12フラン支払われていた。*Ibid.*, p. 41 また彼等は社会での高い地位が認められており、ムシユール(氏)を名前の前に付けられて呼ばれていた。このような例は他の労働者にはない。*Ibid.*, p. 45
- (13) *Ibid.*, pp. 19-20
- (14) *Ibid.*, p. 23
- (15) *Ibid.*, p. 34
- (16) *Ibid.*, p. 35
- (17) 1866-1875年は経営者が経営の急速な拡大のために、地元で労働者を徴募する例が多かった。*Ibid.*, p. 203
- (18) 小規模職人、普通の土木労働者、小商人などを含んでいる。*Ibid.*, p. 203

- (19) *Ibid.*, p. 43
- (20) *Ibid.*, pp. 53-54
- (21) *Ibid.*, p. 75
- (22) ミシェル・オークチュリエ Michel AUCOUTULER (1863-1916年) アリエ Allier 県モンリュソン Montluçon 市に生まれ、父親とともにカルモアにやって来てルセギエが経営する硝子工場に雇われた。彼はこの地で結婚して娘をもうける。彼女は将来第4共和政初代大統領になるヴァンサン・オーリオル Vincent AURIOL と結婚する。彼女は夫とともに世俗的埋葬の推進者で、1895年のボードの母の葬儀は非宗教的に執り行った。1895年の硝子工場のストライキに際してはストライキ委員会の委員長を務め、仲裁で終結させようとするが果たせなかった。その直後ストライキに関係して幾度か逮捕された。アルビに「労働者硝子工場」が設立されると彼は管理者になり、1903年からはトゥルーズにある同工場の倉庫管理者を務め、間もなく同市市議となった。Jean MAITRON (sous la direction de) ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. Troisième partie : 1871-1914, de la Commune à la Grande Guerre*. Tome 10, pp. 166-167
- (23) 注(28)参照。
- (24) シャルパンチエの経歴の詳細は不明である。
- (25) 拙稿「社会主義派代議士ジャン・ジョレースの誕生」國學院法學、第33巻、第4号、1996年、「第2章 カルモア炭坑の労働者の生活環境と労働、第3節、労働組合組織の推移変遷と労組指導者カルヴィニャック」pp. 132-139を参照されたい。
- (26) COMPÈRE-MOREL (sous la direction de) ; *Encyclopédie socialiste et coopérative de l'Internationale ouvrière*, HUBERT-ROGET, *La France socialiste*, Tome III, *Les Fédérations*, XII, Paris, Aristide QUILLET, 1921, p. 9
- (27) *Ibid.*, pp. 15-16
- (28) BEAUDOT (もしくは BAUDOT), Jean, dit Marien (1868-1952) 1868年にアリエ県 Allier のモンリュソン Montluçon に生まれ、1952年にセーヌ県で他界している。カルモア硝子労働者労働組合と社会主義派の活動家。アルビ労働者硝子工場の経営管理者 administrateur となった。8歳で硝子工場の見習労働者となり、さらにマルヌ Marne 県ランス Reims 近郊のコルモントルイユ Cormontreuil でさらにきびしい見習をおこなった。1886年ゲード派活動家として知られるドルモア DORMOY の影響の下、社会主義者となる。ストライキ事件のあとモンリュソンをあとにして、1890年にカルモアに到着し、さらに翌年イタリアに休暇のためにやってきた。1892年にはカルモアに戻り、家族を持ち、周囲と打ち解け、労働運動の先頭に立った。彼は反教権的(反カトリック)なことでも知られ、友人たちの争議で本領を發揮した。彼の社会主義的傾向は厳密に言うならばランキ派で同派のシェール県選出代議士ウジェー

ヌ・ボーダン Eugène BAUDIN の指導下にあった。社会主義統一を目指すジャッピー大会、ヴァグラム大会にも参加し、統一社会党結成後は終生この党に忠誠を続けた。健康を害した後は、パリの労働者硝子工場倉庫の責任者となり、1920年に引退した。Jean MAITRON (sous la direction de) ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op. cit.*, Tome 10, pp. 234-236

(29) この発端はボードの盟友で炭坑労働運動の指導者カヴェニャックは大雑把で用心深さが欠如していたことに付け入れられ、カルモー市長が選挙名簿改訂を放棄していたことが政府に咎められた。そして1894年3月12日に閣議決定でカヴェニャックは1年間職務停止を宣告される。これに対抗してカルモー市議会は議員全員が辞職し、再度社会主義派が勝利して、カヴェニャックが再度市長に選ばれる。しかし政府により市長選挙は無効とされ、策尽きた社会主義派議員たちは第1助役のマザン MAZEN をカヴェニャックが再度市長に選ばれることが可能となる日まで1895年4月市長代理とした。県知事ドーに手懐けられたマザンはその時が到来しても市長を辞職しなかった。辞めない市長を裏切りだと非難するカヴェニャックとボードなどは議会を騒然とさせたとして処分を受けた。ボードは解任され、カヴェニャックは40日の禁錮と5年間の市民権剥奪の刑をうけた。Max GALLO ; *Le grand Jaurès. biographie*, Paris, Robert-Laffont. 1984, p. 170

1895年7月28日の郡議会・県議会議員選挙でボードとカヴェニャックは立候補し前者が郡議会議員に後者はタルン県の県議会議員当選する。直後の硝子工業労働者の労働組合大会に会社からの休暇の許可をもらう正規の手続きをとらずに大会に出席したためにもう一人の組合員とともに解雇された。経営者のルセギエはこの件についてのあらゆる仲裁を拒否し、ストライキに対決姿勢をしめず。*Ibid.*, pp. 170-171

(30) この時に欠陥硝子壺の問題が惹起していた。あまり欠損がひどくない硝子壺を製造したことで賃金が押し下げられていた。「スゴン (セカンド) 2級品」として認められた欠損硝子壺はルセギエが譲歩して、1日25本までを買い取り半額を支払うと譲歩した。労働者側はこの妥協を受け入れた。しかし彼の処分は変更されなかった。Joan Wallach SCOTT : *The Glassworkers of Carmaux. op. cit.*, p. 147

(31) *Ibid.*, p. 148

(32) *Ibid.*, p. 150

(33) *Ibid.*, p. 151

(34) *Ibid.*, p. 151 その内訳は165名の硝子吹き労働者、100名の運搬労働者、で残りが補助労働者 (ギャルソン、) で218人の補助労働者と187名の女性労働者から構成されていた。*Ibid.*, p. 151

(35) *Ibid.*, pp. 151-152

(36) *Ibid.*, pp. 155-158

- (37) *Ibid.*, p. 154
- (38) ミシヨンの経歴は不詳である。
- (39) Joan Wallach SCOTT : *The Glassworkers of Carmaux. op. cit.*, p. 156
- (40) Rolande TREMPÉ ; «Jaurès et la Verrerie ouvrière». dans *Acte du Colloque. Jaurès et la Nation*. Organisé par la Faculté des Lettres de Toulouse et la Société d'Études jaurésiennes. Toulouse. Association des publications de la Faculté des Lettres et Sciences Humaines de Toulouse. 1965. P. 199
- (41) *Ibid.*, p. 200
- (42) *La Petite République*, le 26 novembre 1895 cité par *Ibid.*, p. 200
- (43) Victor ROUQUET ; *La Verrerie ouvrière d'Albi. Contribution à l'étude des Associations ouvrières de production*. Rodez, Imprimerie Georges Subervie. s. d. (1932). p. 97
- (44) アレクサンドル・リボ Alexandre RIBOT (1842-1923) パ・ドゥ・カレー県選出の穏健共和派右派 (プログレティスト) の政治家。司法官出身のリボは共和派の政治家としてマクマオン大統領=レジティミスト (正統王朝派) の共和派への強圧的事件として象徴的出来事であった5月16日事件に際して政府に抵抗した。第1次世界大戦開戦に至るまでリボは穏健共和派左派 (ガンベッタの影響が濃い) とともに政権をつくることはなかった。cf. Pierre PIERRARD ; *Dictionnaire de la Troisième République*. Paris. Larousse. 1968. pp. 216-217
- (45) Claude WILLARD ; *Les Guesdistes. Le mouvement socialiste en France (1893-1905)*. Paris, Éditions sociales. 1965. pp. 194-195, Rolande TREMPÉ ; «Jaurès et la Verrerie ouvrière». *op. cit.*, p. 206
- (46) Rolande TREMPÉ ; «Jaurès et la Verrerie ouvrière». *op. cit.*, p. 203
- (47) この委員会はヴィエイユ-デュ-タンブル通り委員会 Comité de la rue Vieille-du-Temple と称され、一方ゲード派側の委員会はバラ Barrat 委員会と呼ばれた。*Ibid.*, p. 206
- (48) 富裕な利子生活者であったダンブール夫人 Mme DEMBOURG, (エリアヌ・カトリーヌ・グレゴワール Éliane Catherine GRÉGOIRE) は1896年6月6日にブローニュ-ビランヤール Boulogne-Billancourt で78歳で他界している。一説によると彼女は実在しなかった人物でロシュフォールの作り事であったともいわれるが、彼女の名を冠した通りはアルビに実在する。
- (49) この選挙については拙稿「1989年総選挙とジャン・ジョレース——タルン県アルビ第2区の選挙結果と社会主義派代議士ジョレースの落選——」[*國學院法學*]、第45巻、第4号を参照されたい。
- (50) Rolande TREMPÉ ; «Jaurès et la Verrerie ouvrière». *op. cit.*, p. 214